

武田仰天子の生涯と作品

平井邦男

目次

*はじめに

一、幼年時代

二、修業時代

三、小学校教員時代

四、デビュー

五、鶴鳴社

六、東京移住

七、新聞記者の生活

八、東京朝日新聞社時代

九、晩年

*おわりに

はじめに

武田仰天子と言っても、今では大抵の人が、その名前に心当りがなくであろう。昔、国語の教科書にあった「くらべ馬」の作者だと言うと、年配の人なら、「そう言えば、そんなものを習ったことがあるな」と言う程度の記憶があるだけだろう。武田仰天子は、それほど現代では忘れられた存在なのである。ところが、この仰天子は、明治の中頃から大正にかけて、一世を風靡した流行作家だったのである。明治二十年代には

武田仰天子の生涯と作品

当時の文壇の登竜門的存在だった雑誌『都の花』に「三都の花」、「水の余波」以下の作品を次々と発表し、関西在住の異色の新進作家として認められ、尾崎紅葉らと共に『新著百種』に「新所帯」を載せるに至ってその文壇的地位を確立し、大阪の文芸雑誌『なにはがた』に参加した時には、西村天囚、渡辺霞亭らとともに関西文壇の一方の旗頭だと思われるのである。また、三十年代には、東京朝日新聞の記者として半井桃水と並ぶ新聞小説の書き手として知られ、歴史小説の先駆的存在とも言えるべき地位を確保していた。

これほどまでに活躍した武田仰天子なのに、その名がどうして忘れ去られてしまったのか？その原因は色々あるだろうが、一つには、仰天子の自由を求めるコスモポリタンの気質が挙げられるかも知れない。彼の生涯は、周囲の様々な制約を乗り越え、より多くの自由を目指すものであった。そのために、家業を捨てて教師になり、また教師から小説家へ転出し、さらには大阪から東京へと移住するという冒険を次々に行っている。その結果彼は、成功と自由を手にした訳だが、他方でいわば故郷喪失者としての悲哀も感じなければならなかった。作品を書く上では非常な活躍をしても、彼は、文壇の交際や人間関係の上では孤立していたように思われる。また、彼自身それでいいと思っていたような感じがあるのである。それ故、彼には弟子と呼び得る者は、わずかに教師時代の幣原坦、喜重郎の兄弟だけであり、彼等は終生仰天子を師として仰いだ。だが、文壇関係者ではそのような者はいなかったであろう。それ故に彼の死後、仰天子の名前は次第に忘れ去られて行き、今では殆ど知る人がないようになったのである。

勿論、いま仰天子の作品を読み返して見ると、作品そのものはやがて消え去るべき運命をもっていたと言わねばならない。文章の彫琢といい、テーマの掘り下げ方といい、下地となる知識や教養の質といい、漱石や鷗外、谷崎や芥川などの所謂近代日本文学の大家達とは比べべくもない。仰天子の作品が、これら西欧の新知識を備えた近代文学者達に伝統的な文学の材料を提供したことは間違いない。その意味では近代文学の形成に何等かの寄与を行っているわけだが、彼の作品そのものは歴史の風雪の中では次第に消え去っていくものであると言えよう。それは必然的であり、致し方のないことだろう。いつの場合も一人の大家が存在する為には、これらの多くの群小作家達が必要だったからであり、武田仰天子は、客観的に見れば、それらの多くの群小作家達の一人であったと言える。

しかし、そのような作家であったとしても、その生涯を辿ってみると、そこには江戸時代から明治、大正と近代化を押し進める過程の中で生まれる数々のドラマが隠されており、それは一種の感動をともなって我々に迫ってくるのである。私、が、いま武田仰天子を取り上げ、この論文

を書こうとするのは、仰天子に対するきわめて個人的な興味ともう一つ、これら多くの埋もれた人々の努力と業績の蓄積があったからこそ、現代の日本の文化が存在すると考えるからである。そして、これらの埋もれた人々の一人の生涯を辿ることによって、日本の近代化とは何であったのかという点にもいくらかの反省を加えることが出来るようになるからである。

実を言うと、武田仰天子という名前は、私にとっては小さい時から、心の支えであり、心の灯火であった。その名前は、私の心の奥深くに秘められており、無意識の内に私の人生を左右したであろうと思われる。私が、大学を受験する際、文学部を選び、将来、小説家になろうと思っただのも、仰天子の影響である。また、ふとしたきっかけから哲学を専攻することになった後も、文学には興味を失わず、数年前から文芸論の講義を受け持つようになったのも、広く考えたと仰天子の影響と言うことも出来るであろう。と言うのは、武田仰天子は私の曾祖父なのである。

これと言って何も誇るべきものを持たない私の両親は、私の子供の頃から、何度も何度も、仰天子という名前を繰り返すのであった。そして、その名はいっしょに私の心の奥底に深くしまい込まれていったのである。

中学生の時、学校の図書館にあった「大人名辞典」を何げなく見ていて、武田仰天子の名前を見付けて驚き、胸をときめかしたのを覚えている。コピーの機械のない時代だったので、高鳴る胸を押えながら、一字一字ノートに書き写し、しばらくじいっと眺めていたものである。そして、それ以来、自分も曾祖父のように小説を書き、人名辞典に載るようになりたい、といっしょか考えるようになっていたのである。

今から六年前、昭和五十五年の春のことであった。私は、どういう訳か、その時妙に仰天子のことが気になり、自分のルーツを知る為にも仰天子のことを調べようという気持ちになっていた。そして、仰天子のことを実際に知っている唯一の生存者である私の母方の祖母、山村年——彼女は仰天子の三女である——に会い、話を聞き、記録を取ったり、図書館にある仰天子の作品をコピーして読んだりした。既に九十歳を越えていた祖母は、耳も遠くなり、こちらの言うことは殆ど理解出来なかったが、ボンヤリした記憶の中で強烈に覚えている仰天子のイメージを、繰り返し語ってくれた。しかし、その時は資料不足のために、論文を書くには至らなかった。そして今年、親族の一人の結婚式があり、その機会に叔父をはじめ従兄弟らに会い、仰天子の話をしている内にこの論文を書いてみようと思う気持ちになったのである。まだまだ資料も不足だし、分らない事ばかりではあるが、この機会を逃すと、何時書けるか分からないので、不完全なものではあるが手持ちの資料だけでまとめてみたいと思う。

一、幼年時代

武田仰天子は、本名を武田^{まことし}穎といい、安政元年七月二十日に大阪の堂島に武田徳平の長男として生まれた。父の武田徳平は大阪の若江郡にいた武田源氏の流れを汲む一族の出身である。真実かどうかは分らないが、私の家に伝わる話によると、彼はお寺の住職の息子で、幼い頃は植村（または上村）姓を名乗っていたと言う。この言い伝えを裏付けるような話を仰天子自身が書いている。森鷗外の主宰する『しがらみ草紙』二号にある「葉さくら」に次のような下りがある。

《つくつく我れを見入り居りたる婦人あわただしく、「もし貴君は植村さんではござりませんか」と叫びたり。この声に我れ立ちどまれば、「確に渡辺橋すぢの辰之助さん」と重ねていふ。

はて我がをさな名生産の地を知って居るは不思議と、一足戻って見返ったれど、われには更に覚えなし。》

勿論、これは小説であり、フィクションである限りは、ここに書かれていることがそのまま事実であるとは断定し難い。しかし、この小説を批評している鶴鳴社の社員たちの評からもこれがかかなり事実に基づいた話らしい事は察しがつく。その後、《あの時分に貴君は遠い所へ御修業にお越しになったと聞きまして、まことに本意なう思ひました。》という文章がある。これも言い伝えと一致するのである。

さて、この稿を書いている間に、たまたま私の書いた投稿文が朝日新聞に載ったのであるが（資料8）、それを見て、上村氏の子孫の方から電話を頂いたのである。そうして、我々の言い伝えが真実であることが判明した。

それによると、武田^{サトシ}穎は、幼名を植村辰之助といい、植村保兵衛、むらの三男である。植村氏はもと植村の字を用いていたが、いつの頃からか上村に変わっている。植村保兵衛は、文政三年五月六日生れ、大阪で小間物屋を営んでいたが、なかなかの文化人であり、俳諧をよくし、また書や画にも趣味を持っていた。恐らく、仰天子の学問好きや文人趣味は、この保兵衛の影響ではなからうか。また、仰天子という号も、最初は俳諧の号であったのかも知れない。後に述べる吉田香雨もそのようなことを示唆している。母のむらは、天保二年一月十五日生れ、当時としては大変に長寿で、大正十一年一月二十八日、満九十一歳まで生きている。

植村辰之助は、時代が江戸から明治に変わった頃、大阪から、堺の方へ行ったらしい。これは推測に過ぎないが、最初は、言い伝えにあるように堺のお寺に小僧となつて行ったのかも知れない。(言い伝えでは堺の住職の息子になっているが……)そして、そこから武田氏へ養子に行ったのであろう。今のところ、彼の戸籍上の父、武田徳平については何も分っていない。明治十六年八月八日にこの武田徳平から分家していることが分っているだけである。

武田家へ養子に行った理由は、色々伝えられている。一つは、明治政府になり、国民皆兵制をとったことから、「徴兵逃れのため」というのがその理由である。当時は、長男や養子は徴兵の対象からはずされていたので、そのような「徴兵逃れ」は多くあったらしい。また、もう一つ伝えられている話は、妻のスマの実家である高松家は、所謂士族でかなり格式の高い家柄だったので、結婚のため格を整えるために武田家へ養子に行き、そうして結婚したのだ、というのである。また、仰天子の三女むすめ年の伝える話では、仰天子は子供の頃から勉強が非常に好きで、夜も行灯あんどんに衣を掛けて隠れて勉強していた。それで「そんなき勉強が好きなら……」というので、武田家に養子に行った、と言う。

以上、養子に行った理由は色々伝えられているが、大切なのは、仰天子が自己の可能性の開ける道として、植村から武田へと移ったこととである。彼の人生への出発点は、この可能性への挑戦と共に始まっている。それ故我々は、仰天子のこの踏み切りふみきりを尊んで、仰天子を明治時代に始まる武田家の祖と考えたい。また、そう考えることは仰天子の意志とも合致すると思う。

二、修業時代

仰天子の生涯を振り返ってみると、彼は、一生の内に何度かの大きな跳躍を試みている。そのまず、最初の飛躍は、先に述べたように、植村から武田へと移ったこと、即ち、彼が親代々の家業を捨て、学問の道を志したことである。

時は、まさに江戸徳川時代から明治維新へと移り変わろうとしている激動の時代であった。仰天子は、その時代の流れを敏感に感じとって、新しい世界へと跳躍を試みたのである。彼は自己の可能性を發揮出来る場所として学問芸術の世界を選び、そこで自己の志を立てようと決心したのである。それは、前近代的な地縁血縁の共同体から脱出し、新天地を求めようとする、仰天子のはげしい意気込みでもあった。

資料3によると、彼は漢籍を高木越橋に、漢詩文を近藤南州に、南画を水原梅涯に学んだことになっている。これは、皆、当時としては相当な学識を持った一流の学者達であった。仰天子が、彼らに何処で学んだのかは、不明であるが、彼が新しく開設された高等教育機関である河泉学校を卒業していることから考えて、恐らくそこで彼らに学んだのではあるまいか。

河泉学校というのは、「堺市史」によるともと堺県学と言っていたが、明治六年八月から七年十二月まで使用していた校名であり、その後は堺師範学校と改称され、やがて大阪師範学校に合併されている。当時は、堺県が河内と和泉の両国を管轄していたので、河泉学校という名称が付いたらしい^①。ともあれ、明治五年八月の学制発布に伴い、正規の教員を養成する機関として作られた学校に仰天子は学んだのである。創成当時の師範学校は入学選抜も厳しく、授業もかなり高度なものであったと思われる。この学校を出たものは、正規教員である訓導に任ぜられ、現在の校長或は教頭待遇で各学校に赴任して行ったのである。

向学心に燃えた仰天子は、ここで教えられた科目は、砂が水を吸うようによく吸収していったであろう。ただ惜らくは、外国語の知識に関しては、ほとんどそれを教えられていなかったことである。そこに仰天子の限界があったといえる。彼の学んだのは、旧来の漢籍を中心とする学問であった。勿論、それから進んで言文一致の新文学にも目を開いて行ったであろうが、新知識の源泉たる外国語には無知であった。時代の制約とは言え、我々の目から見てそこに仰天子の限界が存在すると思われるのである。

三、小学校教員時代

河泉学校を卒業した仰天子は、恐らくすぐ何処かの学校に赴任したに違いない。資料2によると、「明治七年から十八年まで小学校教員」とある。最初にどの学校に勤務したのかは不明だが、明治十二、三年頃には、北河内郡の門真村の小学校に移ったことが分っている。門真町史には、明治十八年三月十三日の日付で、「門真村小学校在勤 五等訓導 武田頼^①」の記述が見える。また、仰天子の教え子で後年、外務大臣になり、戦後総理大臣になった幣原喜重郎の伝記には次のような文章がある。

《明治初年頃の小学校教師といふと、殆んど例外なく儒者上がりか乃至は僧侶か、お医者さんと大体相場はきまつてゐたやうだが、幣原兄

弟が通つてゐた願得寺小学校でも、そのの住職が校長兼教師といふ有様であつた。幸ひなことには、間もなく大阪から二十四五歳の若い先生が赴任して来た。その名は武田顛といひ、生粹の贅六ぼんちであつたが、誠に学問好きな好青年であつた。この先生は漢籍を高木越橋に、漢詩文を近藤南州に、南画を水里梅涯に学んだという秀才であつた。従つて世上にありふれた四書五経一辺倒の腐儒ではなく、頗る進歩的な考へを持つてゐたのである。尤もこの人は後に大阪朝日新聞に入り、更に中央文壇に進出して名声を挙げた有名な小説家武田仰天子の前身であるから、当時の小学校教師としては実に出色の人材であつた。

この仰天子が教壇に立つや、早くも幣原兄弟に囑目し、兄垣を大ぼんち、弟喜重郎を小ぼんちと愛称して、これが訓育に大に力こぶを入れた。蓋し幣原兄弟が小学校時代にかういふ新進の青年教師に教へられたといふことは、彼等の進学上に至大の好影響を与へたことはいふまでもない。ところで、垣は生来穩かな性質でその学習態度も頗る真面目であつたが、喜重郎の方は生来のきかん氣に加へて、頗るやんちゃであつたから、仰天子は常々何とかして、もつと謙虚なおとなしい子供にため直してやりたいと考へてゐたやうだ。或時余りにいたづらが激しいので、つかつかとなつて、そばにあつたそろばんを取り挙げ、手厳しく折檻した。その拍子にそろばんが壊れて、球は散乱した。この情けの折檻は余程こたへたと見えて、それからといふものは喜重郎の学習態度は、急に一辺してよくなつた。晩年になつて、幣原兄弟が顔を合はせて小学校時代の思ひ出話にふけるとときには、いつもこの話が出て、その當時を懐かしがるのが常であつた。²

仰天子は、門真の願得寺小学校では、ただ一人の正規の訓導として、若いながらも責任者の地位についていた。多分、最初は、住職の校長を補佐する教頭といつた所であらう。後には校長になつてゐる。この文章から察すると、仰天子は、自己自身もまだ向学心に燃えており、また教育においても大変熱心であつた。とりわけ、幣原喜重郎は、このそろばん事件のせいだ。仰天子を終生恩師として敬い、後に仰天子の二男茂を秘書官として用いたりしてゐる。喜重郎が中学を受験する際には、「父と武田教師に付き添はれた」とあるように、公私にわたつて深い交際があつたのであらう。

我々の家に伝わる話では、仰天子は門真で漢文の私塾を開いていたが、そこで幣原兄弟を教えた、というのである。今回調べて見て、小学校の教師をしていることが分り、ちょっと意外な感じを持った。ひよっとすれば、学校以外に家でも塾のようなことをしていたのかも知れない。それはともかく、仰天子は教師をしながら、着々と実力をたくわえ、小説家となる準備を整えていつた。家庭的にも一家を構え、明治十二年

三月には高松スマと結婚し、長女翠、長男榮、二男茂を次々もうけ、武田徳平家から分家した。小学校教員の十年余りの期間は、仰天子にとって実力養成の時期であった。

四、デビュー

小学校の教員をやめ、文壇にデビューしたのは、仰天子の第二の跳躍であろう。資料2によると、「明治七年から十八年まで小学校教員」とある。そして「二十一年発表の処女作『水の余波』が好評を博したのが縁となり、『大阪いろは新聞』の記者となる」とある。恐らく、この記述は、直接本人が書いたか、或は誰かが本人に聞いて書いたかしたものと思像されるので、ほぼ間違いないであろう。ただ、それでは十九年から二十一年の間は何をしていたのか、という疑問が残る。また、この記述では、処女作が「水の余波」となっているが、他の資料では、処女作は二十二年に雑誌『都の花』に載った『三都の花』となっている。このあたりの記述の不一致をどのように解釈したらよいのだろうか？

資料1によると、「年十四家を出で河泉の間を放浪し或は教師となり或は官吏となった」とある。ここから、推測出来るのは、明治十八年まで教師をしていた仰天子が、十九年から二十一、二年までの間、官吏になっていた、ということである。官吏といっても、それは、恐らく現在の教育委員会のような、教育に関する役所であつたらうと思われる。或は史料編纂室のようなより研究的な分野であつたかも知れない。仰天子の学問好きと向学心は、そのような場所を選んだのであろう。

そうして、より研究的な場所にあつて、時間の余裕を与えられた仰天子は、小説を書いてみようと思つたのではないか。多分「水の余波」は懸賞小説に応募して当選した作品である。これがはじめて活字になり、原稿料をもらったという点では、処女作といえる。しかし、『大阪いろは新聞』というのは、当時でも地方の小新聞であつたらうし、人の目に触れる機会も少なかったもので、中央文壇の堂々たる雑誌『都の花』に載つた「三都の花」を処女作としたのであろう。「水の余波」は、後に手を入れて『都の花』に再録している。それ故、我々も仰天子の処女作は「三都の花」であると考えことにしよう。

さて、ここで仰天子の作風を一瞥してみよう。処女作「三都の花」は、東京、大阪、京都の方言をうまく組み合わせ、当時の言文一致の流行

を取り入れた小説である。恐らくその関西弁が面白がられたであろうことは想像に難くない。小説の筋そのものは、江戸時代から多くある所謂世話物の筋立てである。これもそうだが、仰天子の小説は最後が、めでたしめでたしのハッピーエンドになっているものが多い。しかし、初期の仰天子がもてはやされたのは、その物語の筋立ての面白さではなく、その文体の軽妙さや洒脱さであろう。例えば「三都の花」の最初の部分は、次のような文章ではじまっている。

第一回 花見

《なるほど美人だ：悪いところを除ければとは下さらぬ婦人を評した言葉、なるほど美人だ：悪いところが有つてもとは此二人の娘の事ではやう。》

先に進むのは奏任車、犬が吠付くほど磨きたてた蠟塗の車台の背面に金粉で小さな肥後桜の紋一つ。

そして其中の美人は：美人とは気掛りだ：全体どういふ美人か：それはご無理、今やつと車の紋所を見付けた所ですもの、背面の美人、残念ながらお顔を見ることは出来ません。が、ふつさりと結んだ高髷頭の黒味、それと薄紫色の半襟との間に真白な細首が車にゆられて嬌娜つて居る藍梅、そのはへあひの好いこと。うたゝお顔が―好い機会です―見えました。路傍に蒲公英が一二輪あはれに咲いて居るのが御意に叶つたものと見えて、これを指さして後の娘を見返り嫣然と笑ひました、「あれご覧」と云さうな。なるほど美人だ。年は十八九、冷やかな眼、しまりのある口、眉は濃やかに生揃つて尾はびんとはね、鼻はちんまりとして高からず低からず、顔は瓜核形、総体瘦形で着てゐるものも重さうに見えます。きつぱりとして高尚い：その高尚い、敵とした所が、すなはち愛がない―悪い所―と妬むのでしやう。着物は何か：車台に掩はれて襟まはりが見るばかり。頭には金台に五分玉八方転の極薄色の珊瑚の釵、それがたつた一本要部にぐさつと挿されて居ます。》

この文章に見られるように、仰天子は文章と遊びたわむれながら、あたかも読者と会話をしているような調子で書いている。つまり、一つの文章を書き、それに対する読者の反応を予測し、その予測に対してスカしたりナダメたりしながら、次の文章を引き出しているのである。初期の代表作の一つ「徳用番傘」の評でも「『と見ると……』という言い廻しが多い」とあるように、この読者との対話式の書き方が仰天子本来の持ち味であろう。このような書き方をする作家は、現代ではほとんど見られないが、面白い書き方として復活再興してみてもよいのではない

か。

とにかく、デビュー以来、仰天子の活躍は目著しいものであった。『都の花』には、ほとんど毎号長編を連載し、尾崎紅葉らの主宰する『新著百種』16号に「新世帯」を発表して、その文壇的地位は堅まった。

明治二十四年に発行された吉田香雨の「作者評判記」には、当時有名な作家三十八名の評が載っているが、仰天子は森鷗外につづいて七番目に紹介されている。その文章を引用すれば、次のようである。

《 仰天子……武田顕君

仰天子は大阪小説家の新顔なり其名を世人に知られたるは実に都の花を以て嚆矢とす子が文章は初め言文一致なりしなり特に一調子変りたる大阪風の言文一致にてありしなり而して其言文一致家中大阪風を写せるものは君を以て巨擘とす君自らもまた斯く心中に許すなるべし然るに近來は流行の西鶴エンザに感ぜられて大いに此熱を上げらる、由あはれ俳園否な肺炎に変症して大病人となられざるやう予て注意が肝要なり然れども君は又作者中の才子なりその言文一致と云ひその西鶴の流義と云ひ着々時の流行に投じて筆法を変ぜらるゝの一段は実以て機敏といふべし語に曰く聖人は物に凝滞せずよく世と推移るとされは子は又作者中の聖人か夫とも君子の豹変家(？)兎に角目覚しき働人といふべし。》

この評から察すると、最初は大阪の方言を用いた言文一致体、それから西鶴調を混ぜ合わせた独特の文体の持主と思われていたらしい。途中、「あはれ俳園否な肺炎に……」という言葉を読めば、仰天子は元々俳諧をやっていた、そして肺や気管支が弱かった、ということを示唆しているのではないか。ともあれ、デビュー当時の仰天子は、大方の注目する存在であった。

五、鶴鳴社

仰天子は、官吏を続けている間に懸賞小説に当選し、それをきっかけに「大阪いろは新聞」の記者になったのであろう。考えてみれば、これは大変思い切った冒険である。いわば堅い、安定した身分である官吏の職を投げ捨てて、未だ海のものとも山のものとも分らない新聞記者にな

るのは非常に勇気のいることである。しかも、この時、仰天子はもうそれ程若くはなかった。年齢は三十五、六歳。妻と子供を少くとも三人は抱えていた筈である。転職するには、いささか遅すぎる最後のチャンスであったと言えよう。しかし、仰天子はこの冒険に敢然として挑んだのである。そして、それは成功した。確かにデビュー当時の仰天子の活躍は目覚ましく、一、二年のうちに彼の名は、全国の文学ファンに親しまれるようになっていた。そして、仰天子は、尾崎紅葉らの硯友社と同様な文学結社である鶴鳴社を大阪に創り、その中心的人物として関西文壇の一方の旗頭となるのである。

鶴鳴社のメンバーは、武田仰天子をはじめとし、木崎好尚、磯野秋渚、武富瓦全、そして〇〇梅外（名字不明）の五人であったらしい。若くして死んだ近松門左衛門の研究家、武富瓦全の遺稿集に、木崎好尚の書いた漢文の弔辞が載せられているが、その中の一節に次の文章が見られる。

《曾与仰天子秋渚梅外及予等相謀。創鶴鳴社。揚摧文雅。瓦全子年最少。風姿都雅。眉目如画。才名庄儕。矣後入浪華文学会。作小説。文名漸著。無幾入京。与硯友社名士交。又入民友社。》

この五人は、やがて浪華文学会に参加し、当時大阪文壇の最も有力な雑誌『なにはがた』の執筆陣となる。大阪朝日新聞の記者を中心とした『なにはがた』のメンバーは、当時大阪市の南部、桃谷にいた西村天囚、渡辺霞亭、本吉欠伸らの桃谷小説派と北区堂島、天満あたりに居た鶴鳴社の社員たちのグループとに別れていたらしい。仰天子はこの鶴鳴社の中心的人物であった。この鶴鳴社の社員の生活がどのようなものであったかは、次の文章でほぼ、察がつく。

《この一月の初天神の日、例の好尚秋渚の二子、わが天満の贅六庵を叩きて、「天神まうでの道すがらなり。君も共に参詣して、手の上がるやうに祈りたまへ」といはるゝに、『これより上達したうはないが』と、負け惜みいひ／＼打ちつれて庵を出で菅廟に謁しての帰り路、たま／＼社員梅外子に逢ひたりしが、互ひに「この儘分かるゝは本意なし」といふ、今日はまだ駄洒落を吐かねば、みな／＼口の燃ゆるゆゑなり。梅外「これより遠くもないゆゑ、僕の宅へ来たまへ」といふにおつと来たりと、言ひだした男を先に立て、西の方さしてぞろ／＼従ひゆき、程なくその宅に到れば、主人梅外骨董好きとて、「この品は巖島の経巻のうつし、これは葦葎堂が遺愛の印篋」と、敗鼓の皮めいた物まで列べたてゝ、一々順序を備へてその来歴を述べつゞけるに、「ありがたうござります。もう大分厭いて参りました」と、秋渚の

憎まれ口^②》

また、仰天子は『なにはがた』第六巻に「滑稽五人男」という題で、この鶴鳴社の五人組の様子を小説にしている。それによると、八軒家にあつた木崎好尚の家が鶴鳴社の本部になっており、仰天子が長老、武産瓦全が若役^{わかやく}、磯野秋渚が一番のおしやべり、梅外が悠長な男という風になつてゐる。

恐らく、ここに描かれているように、この五人の鶴鳴社員は、事あるごとに寄り集つて、飲食をしたり、議論をしたり、花見、月見、雪見と称しては、風流人を気取つてあちらこちらへと繰り出していたのであろう。この「滑稽五人男」は、夜の十二時に大阪を出発し、将棋盤を持ちながら、夜通し歩いて蓮見に出かける様子を落語的なタッチで軽妙に描いている。鶴鳴社の生態を知る上で重要な作品であらう。

六、東京移住

このように文壇的地位を確立し、鶴鳴社を創設して活躍を続けていた仰天子に、人生最大の転期がやって来た。即ち、東京移住である。資料1によると「二十四年東京新聞の聘に応じて上京し後改進黨新聞に転じ」となつてゐる。また資料2、または資料5によると「都・改進黨・中央新聞の三面記者となり」とある。これらの資料を信ずれば、仰天子は明治二十四年に大阪から東京へ移住を行ったのである。この移住は現代我々が考へてゐる程、安易なものではない。特に仰天子の場合、それは並々ならぬ決意のもとになさねば決行であつたといえるだらう。

仰天子は何故東京移住を決意したのであろうか？これが私の長年の疑問であつた。今回、色々調べてみて、仰天子の氣持がおぼろげながら理解出来るようになった。

まず、家庭的な事情である。ここで仰天子の家庭について説明してみよう。図1を見てもらいたい。仰天子は子宝にめぐまれ、二男七女、九人の子供がゐる。最初の五人が大阪時代の先妻スマとの子供であり、後の四人が東京移住後の後妻初^{はつ}との子供である。最初の妻スマは高松家の長女であり仰天子とは三歳違いの安政四年十一月二十九日生れである。高松家は淀川水系の治水を司る大阪奉行所の与力であり、かなり格の高い家柄であつたらしい。一説によると、仰天子はこの高松家に婿養子に行ったのだが、舅との折合いが悪く、武田家に戻つた。その時、妻スマ

七女 里(浅井家へ)

六女 光(明治三十五年五月二十二日没)

五女 芳(明治二十九年十月二十二日没)

四女 文(明治三十八年六月四日没)

三女 年(宗教家、山村家へ)

二女 秀(明治二十三年十一月二十日没)

二男 茂(官吏、幣原喜重郎秘書官)

長男 祭(彫刻家、アルゼンチンへ)

長女 翠(平井家へ)

(渡辺) 初

(高松) スマ

武田 穎

図1

も高松家を出て仰天子と行を共にし、武田家に嫁いだ形になったのだという。長女翠は明治十二年五月二十四日生れ。彼女は仰天子が東京移住後は、小さい子供たちの母親代りとなってかなり苦勞したらしい。後に平井家に嫁いでいる。長男祭は、明治十六年三月五日生れ。資料7にあるように明治四十年に東京美術学校の彫刻科を卒業した。浅倉文夫と同期生であったが、卒業当時はこの武田祭の方が評価が上であった。文部省の留學生に選ばれてイタリヤに留學したが、帰朝する時期になっても日本には帰らず、イギリス、フランスなどヨーロッパを放浪し、大正九年に日本に帰ってきた。ここで面白いエピソードが残っている。武田祭の帰朝歓迎会が東京の精養軒で行われたが、その時祭が昔の同期生のつもりで「おい、浅倉ノ浅倉ノ」と気軽に呼び捨てにしたらしい。ところが、その頃浅倉文夫は日本の彫刻界のいわば首領であり、そのように気安く呼び捨てにされたことに対して怒りを覚えたらしい。そこから両者の間にひびが入り、結局武田祭は北村西望らと別のグループを作ったという。恐らく祭が、昭和初期に一家を挙げて、日本を去り始アルゼンチンに移住したのもそのあたりに原因があるのだろう。

二男茂は、明治十八年十二月二十一日生れである。明治法律学校を卒業し、官吏となったが、台湾総督府の役人として台湾に赴き、長年台湾に過ごした。最初台北に居り、次いで台中に移り、幣原喜重郎が日本に帰国するのに同行して、日本に帰国した。後幣原の秘書官となって居たが、リユーマチで足を悪くして秘書官を止めた。

二女秀は、明治二十一年十二月十九日に生れたが、二十三年十一月二日、満二歳にならない内に死んだ。

三女の年は、明治二十二年十二月二十四日生れ。年の話によると、年が生れて一時間ほどすると近くで火事が起り、母のスマもあわてて逃げたが、産後すぐの身体にそれが悪く、十日目に死んでしまったという。この話は、多分年が後に仰天子から聞かされたものであろう。実際のス

武田仰天子の生涯と作品

マは二十三年の八月一日に死んでいる。しかし、年が生れ、おそらくその産後の肥立ちが悪くて、妻のスマが亡くなったことが、仰天子の東京移住への引き金になったことは間違いない。妻スマの死に続いて二女秀が亡くなると、仰天子は、十一歳の翠を先頭に、七歳の繁、五歳の茂、そして満一歳にもならない年を抱えて、困惑したのである。そのような時に、東京の都新聞から招聘の話があり、仰天子は清水の舞台から飛び降りるつもりで東京移住を決意したのではないか。それは、仰天子にとっても非常にづらい決断であった。まだ赤ん坊であった年を山村家に養女にやり、翠、繁、茂の三人を親戚の家に預け、単身、東京へ行くのである。

七、新聞記者の生活

上京した仰天子は、仮住いしながら、東京の躍進する姿に打たれ、懸命に新知識の吸収に勤めたであろう。明治二十四年三月に出版された「東京著作家案内」では住所は芝区備前町九番地 久和家方寓（明治文化全集第十二巻五一三頁）となっている。それ故、少くとも、二十四年のはじめには東京に来ていたものと思われる。

はじめの内は、東京での新聞記者生活にも自信がもてなくて、時々帰阪しては雑誌『なにはがた』に寄稿したりして、しばらく大阪と東京を行き来する二重生活が続いたのではなからうか。

ここで当時の新聞記者の生活について少しふれてみると、明治の初期の新聞は今とちがって報道よりも娯楽に主体を置いたものであった。その意味で江戸時代のかから版の延長といった色彩の強いものであった。夕刊はなく、朝刊だけのタブロイド版程の大きさのもので、六頁程度が普通であった。そして、その中で小説は、最も重要な役目を荷っており、連載小説の良悪は新聞の売り上げに直接影響を及ぼした。それ故、各社はこぞって新聞小説に力を入れ、絵入りで紙面の最も大きいスペースをさき、大体、一日に二つの小説を連載していた。そして、新聞記者というのは、この連載小説を担当する作家たちがほとんどで、この作家たちが他の報道記事も書いていたのである。ただ、当時は著作権の觀念などは全くなく、連載小説にも作者の名はなく、誰が書いたものかは判明しない。当時は連載小説も作者といわず編者と言っていた所を見ると、これも報道記事の一種と見ていたのかも知れない。それはともかくも、新聞社は筆の立つ作家を欲しており、仰天子もこうして『都新聞』

に雇われ、以後、『改進黨』、『中央新聞』と次々に引き抜かれ、最後に『東京朝日新聞』の記者に定着するのである。

東京の生活にもいくらか慣れ、仕事の方にもやって行く自信の湧いて来た仰天子に、新しい生活が起り始めた。当時牛込区新小川町に住んでいた渡辺憲の長女初との出会いである。仰天子はこの初と明治二十五年十一月十六日に結婚している。仰天子三十八歳。初は明治三年十一月二十七日生れだから、もう少しで満二十二歳になろうかという年齢である。この後妻初との間に四人の女の子が次々と生れるが、末子の里以外は幼くして死んでいる。四女文（明治二十六年十月八日～三十八年六月四日）、五女芳（明治二十九年四月三日～二十九年十月二十二日）、六女光（明治三十二年十一月二十六日～三十五年五月二十二日）、そして、七女里が明治三十四年十二月二日に生れている。この末子の里が最も仰天子に可愛がられた子供で、後に洋画家の浅井松彦のところに嫁いでいる。

さて、仰天子はこうして東京での新しい生活を始めていったが、彼の心の中には、大阪に残して来た子供たちの事がたえず気懸りであった。特に家督を継ぐべき長男繁の事は、最も仰天子の頭を悩ましたであろう。そして何時の頃かははっきりしないが、実父植村保兵衛が死んだ明治二十七年八月八日以降に、実母むらと繁を東京に呼寄せたものと思われる。それで武田繁は資料7にあるように竹中光重について木彫を学び、後に東京美術学校の彫刻科に入るのである。そして、これに次いで二男の茂も大阪から上京し、明治法律学校に行くことになるのである。

八、東京朝日新聞社時代

明治三十年、仰天子は東京朝日新聞に入社する。最初に書いた小説は「諏訪都」（六月二十七日～八月二十日）である。以後、最後に書いた「清正」（大正五年六月二十七日～九月二十五日）まで、東京朝日の読み物を担当する。とりわけ明治三十年代は半井桃水と二人で交代に執筆する花形作家であった。この頃が仰天子の人生の絶頂期であったろう。やがて明治三十七年三月に二葉亭四迷が大阪朝日に入社、東京在勤になり、また四十年三月には夏目漱石が東京朝日に入り、新時代の文学が新聞小説の世界にも及んできた。この頃主として講談調の歴史小説を書いていた仰天子の時代も過ぎようとしていた。「朝日新聞の九十年」には次のように書かれている。

《一方、「東京朝日」では創刊以来の半井桃水を中心として、宮崎三昧、武田仰天子、三品蘭溪ら、いずれも社内作家たちが、交代で筆

をとっていたが、顔ぶれが同じだけに、ともすれば清新味を欠くらしいを逸れなかった。』

恐らく、外国語がもの出来ず、西欧の新文学の傾向を知ることなく、旧来の世話物から歴史小説に移っていったのが仰天子の限界であったのだろう。歴史小説でも、もっと漸新な文体や筋の展開で読ませれば、また違っていたかも知れない。しかし、次から次へと書かねばならないせいか、文体も無難な講談調を用い、平凡なものに終わっている。

しかし、実生活面で見ると、この頃から生活が安定し、ゆとりのあるものとなっていたであろう。そのせいか、仰天子は晩年は小説よりも画（南画）や書の方をよく描いていたということである。仰天子の書体はおだやかで、『明治世相百話』（中公文庫）には「穩健の筆致」と題して次のような文章がある。

『原稿から見て整然とした穩健の筆致を示される人々は、上記の南翠氏をはじめとして、漱石先生、通俗小説の武田仰天子、外国文学の内田魯庵氏などであるが、後の二氏は万年筆のみ使用された。仰天子は尖端に針金の出ている旧式万年筆（その頃には新式）を得意になって使っておられたが、元來能筆の人だからその字体も面白く見られた。』（二三五頁）

ともあれ、仰天子は当時の新式万年筆を用い、材料を見つけてはそれを次から次へと書きまくっていたのである。作品の質などあまり考えるひまがなかったのであろう。或る意味で流行作家の宿命である。この仰天子も漱石の出現で没落してゆくのである。それも致し方のないことであろう。

さて、こうして一応、安定した生活を続けるようになると、気になるのは、生れたばかりで養女にやった三女年のことである。長女の翠は平井家に嫁いだ。榮や茂は東京に呼寄せ苦学しながらも、学業に励んでいる。しかし、山村家へ養女にやった年はどうしていることか？その他、大阪のことが気になって、仰天子は大阪へ行く。

山村年は次のような逸話を話している。その当時、年は夜学に通うかたわら、大阪朝日新聞の印刷局に勤めていた。或る日、仕事をしていると、上司に呼ばれ、行ってみるとマントを着た知らない人がいる。その知らない人はニコニコ笑いながら「名前は？」と尋ねた。「山村年です」と、年はいつものようにハキハキした声で答えた。「ふうん。年か。お父さんの名は？」「山村勝助です」「お母さんは？」「トキです」「それで年はいまいくつ？」「十三歳です」年は質問に答えながら、奇妙な感じがした。『何故この人はこんなことを聞くのだろう』そう思った途端『アッ！』

と思わず心の底で呼びそうになった。『これが私の本当のお父さんではないか？』そう思いながら、その見知らぬ人をじっと眺めた。その人は相変わらずニコニコしながら話していた。「給金は、いくらもらっているの？」「三円です」「それで、みんなお父さんにわたすの？」「ハイ、みんなわたします」じっと見ていると、そのニコニコした笑い顔の目にうっすら涙がにじんでいた。「そうか。年はえらいなあ。ハイ。もうよろしい」そのマントを着た人は、話を打ち切って、年の頭を撫でながら歩いて行った。

その夜、年が家に帰ると、家の前に一台の人力車が家の前にとまっていた。不思議に思って家に入ると、中には昼間の人が座って待っていた。母のトキはおろおろしながら「親戚のおじさんや、挨拶しなさい」と言った。年が挨拶をすると、その人はニコニコ笑っていた。そして、母のトキが席をはずすと、その人は、年の耳もとで「昼間のことは、誰にも言いなや」と言って笑って見せた。

「この子を一晚貸してくれ」ということになり、年はその人と一緒に待たせてあった人力車に乗り込んだ。「人力車の中に入ったらもう親子や」九十三歳になっていた年は涙を流しながら私に話してくれた。「ぎゅうと手を握って『年、勘忍してくれよ。わしが悪かった。次の家内をもらうと、お前が継子になると思ってなあ……許してくれよ』そう言って泣きはんねん」

この光景は、年の生涯の中で最も大切な忘れられないものだったのだろう。年の亡くなる一月ほど前、夏の盛りの暑い日であったが、その時も衰弱し切った中で九十三歳の年は、この話を繰り返し話した。恐らく、仰天子は年とこのような光景を持つことによって、年を養女にやりながらも、その心の傷を治し、年を救ったと言えるであろう。というのは、年はその後、書けば一編の小説にもなるような波瀾万丈の生活を送りながらも、この時の光景が常に胸にあり、その事によって難局を切り抜け、宗教家としていわば大往生したからである。

その夜は、お寺のような所に泊り、翌日は堺の住吉神社に行ったという。仰天子は、これで立派なアフターケアを行ったと言い得るだろう。

九、晩年

仰天子は、大正五年の六月二十七日から九月二十五日まで連載された「清正」を最後に、東京朝日新聞を退社したと思われる。その後もいくらか小説を書いたと思われるが、彼の一番最後の作品は、私の調べた所では、『面白倶楽部』に書かれた「相馬大作」（大正六年・七月）である。

聞くところによると、当時仰天子は、品川の海岸沿いに豪荘な邸宅を持ち、代々木八幡や渋谷宇田川町に十数軒の家作を持って悠々自適の生活を送っていたらしい。私の父巖が、品川の海見える家に行った時、仰天子は掛け軸らしいものに画を描いていたが、孫の巖を見て、ふとその手を休めて「巖ちゃんか、どうだい、この画をやるうか」と言った。見ると水墨画らしい訳の分らないものが描いてあるので、父は「いらん。もっと色の付いた戦争の絵がほしい」と言った。仰天子は「戦争の絵か、はゝゝ、それはないなあ」と笑ったという。「あの時、あの絵をもらっておくのだった」と父はしきりに残念がっていた。

仰天子は非常に器用な人で、書や画ばかりではなく、彫刻や印刻までこなしたという。武田家では仰天子の作ったひょっとこの彫刻があったそうだし、また南京瓜のへたに仰天子の印を作り、面白がってぺたぺた押ししていたという。

晩年の仰天子は、末子の里を非常にかわいがり、里への愛の中に他の全ての子供たちへの愛を代償させていた。というのは、仰天子には、九人もの子供がいたが、素直に愛情を注ぎ込めるのは里以外にはなかったからである。平井家に嫁いだ長女翠は、大正八年一月十八日に亡くなっており、長男察はヨーロッパを放浪し、二男茂は、役人として台湾に赴任しており、三女年は大阪に居たが、当時の交通事情では、そう度々は東京大阪を往復するわけにはいかなかった。そういう訳で、里だけが仰天子の手許に居て愛情を注げる対象だったのである。

仰天子の実母の植村むらは大変な長寿で、大正十一年一月二十八日まで、即ち、九十一歳まで生きている。仰天子は、どういう訳か、実父の植村保兵衛と実母植村むらの二人だけの墓を、むらの存命中に上村家代々の墓とは別に作り、その墓の建立式を大々的に行っている。その時、里を連れて大阪に帰り、親戚を一同に会している。恐らく、それが仰天子の最後の帰阪であつたらう。

「髪をゾロリと長くのばし、紋付羽織袴で、天を逆さにした紋を付け、まるで由井正雪のようだった」という。顔はあから顔で目が大きく、鼻が高かったので「天狗」という仇名だったらしい。

こうして仰天子は、最後の帰阪を済ませて東京に戻ったが、間もなく中風になったようである。最晩年は中風で寝切りで、後妻の初はその世話で大変だったらしい。

関東大震災の時は、台湾にいた二男の茂が仰天子のことを心配して真先に東京にかけつけたので、仰天子も涙を流して喜んだという。

仰天子は、囲碁や将棋などにも趣味を持っており、とりわけ囲碁はかなりの腕前だったらしい。仰天子の墓は、台東区の谷中にある臨濟宗大

徳寺派の臨江寺にあるが、この臨江寺の住職とは囲碁友達であり、しばらく逗留して毎日碁盤を囲んだらしい。そうして、「俺が死んだら、ここに墓を建ててくれ」と約束して居たらしい。その場所は、蒲生君平（一七六八〜一八一三）の墓のすぐ隣の場所である。

仰天子の墓はあまり大きくはないが、長男の祭が銅版で仰天子の浮彫を作り、それを埋め込んだ変った墓である。その横に背の低い武田家之墓というのがある。それは幼くして死んだ子供たちの墓であろう。

仰天子は大正十五年四月十四日午前四時、豊多摩郡代々幡町大字代々木千六百五十七番地に於て死んでいる。葬儀には、妻の初、祭、茂、年、里の子供達が集ったが、ここに面白いエピソードが残っている。

妻の初は、看病疲れのためにやつれて、ぐったりとなっていた。仰天子は北枕に寝かせてあったが、大阪からかけつけた年が、思わず「お父さん」と言うと、死んでいる仰天子の鼻から鼻血が出たと言うのである。幼くして山村家に養女にやられ、一度も「お父さん」とは呼べなかった年の気持を推し計って作られた話だとは思いますが、今もなお語り継がれている逸話である。

おわりに

今回の論文は、私にとってエポックメイキングなものとなるだろう。今回ほど論文を書いている間に驚きと新しい発見を経験したことはなかった。毎日、新しい事実の発見により構想を立て直し、想像力を駆使して次の調査に取り掛かるといふことの繰り返しであった。

その中でとりわけ大きかったのは、私の中にあつた仰天子のイメージが180度転回したことである。この論文を書く以前は、仰天子の生き方や性格について幾分否定的な見方を持っていた。それは多分私の父や母、そして祖母から無意識の内に受け継いだ見方であろう。それは、仰天子が東京移住に際して子供たちを親戚に預け、単身上京し、そこで新しい生活を始めたことに由来している。「仰天子は世間的には成功し、えらい人だったが、家庭的には冷たい人だった」と父はよく言っていた。

しかし、仰天子の生涯をつぶさに辿り、様々な事実をつき合わせて考えて見ると、そうとも言えないと思うのである。東京移住は仰天子の一生一代の大決心によりなされており、この決意があつたればこそ仰天子の成功があり、彼の後半生の人生の創造があつたのである。我々は仰天

子のこの決心を悪く言うことは出来ないと思う。また、当時の事情を考えれば、子供たちを連れて東京に出ることは到底不可能であり、子供たちを大阪に残したのは止むに止まれぬ事であった。

私の両親は、源をただせば、仰天子の東京移住から由来するひずみを最も凝縮した形で体験したのであろう。その事は私にもよく理解できる。しかし惜らくは、そこから一步を進めて、当時の止むに止まれぬ事情を察知し、仰天子の気持を推測することによって彼を許し、許すことによって自らも救われるという境地に進まなかったことである。私は今回の論文を書くことによって、両親が果せなかった課題を果したような気持になっている。それは、宗教的なコンヴェーションに似た体験である。人を許すことによって自らも救われる。そのことを身をもって体験したこの論文を、今は亡き両親に捧げること、終りたい。

〔註〕

第2章

①「堺市史」第三卷、八五八頁及び八六四頁参照。

第3章

①門真町史 門真町史編纂委員会 昭和37年3月30日発行 八三三頁

②幣原喜重郎 幣原平和財団 昭和30年10月30日発行 十一〜十二頁

③同書十五頁

第5章

①武富春二「瓦全遺稿」明治45年7月25日非売品（大阪府立中ノ島図書館所蔵）

②「竹夫人・鐵如意」『しからみ草紙』17号 明治24年2月25日

資料1 松本龍之助著「明治大正文学美術人名辞書」国書刊行会 大正十五年四月五日発行

武田仰天子 タケタギヨウテンシ（小）

名は願仰天子は其号、別に如心庵の号がある。安政元年閏七月大阪堂島に生れた。年十四家を出で河泉の間を放浪し或は教師となり或は官吏となつた。明治二十二年始めて小説「三都の花」を著し東京金港堂発行の「都の花」に掲載し大に世評を博した。爾後志を決して文壇に投じ二十四年東京都新聞の聘に応じて上京し後改進黨新聞に転じ又朝日新聞に這入つて専ら其小説を担当した。其著に「相思画譜」「局松島」「花ちる里」「楽屋銀杏」「弓矢八幡」等最も称せられ

た。氏は閑余鉄筆を弄して其技の見るべきものがある。

無題

晴明風日家々柳、高下樓台處々山、
煙中楊柳誰開眼、風裏杉松自點頭、
十里長堤分野色、一行遠樹約青天、
朱檻夜飛溪路雪、碧村暗隔馬蹄塵、

(下略)

資料2 稲村徹元等編 「大正過去帳 物故人名辞典」 東京美術 一九七三年

武田仰天子 東京朝日新聞社記者。数年来中風で病臥中大正一五年四月一〇日午前四時半逝去。安政元年武田徳平の長男として大阪府に生まる。本名頴。明治七年から一八年まで小学校教員、二二年発表の処女作「水の余波」が好評を博したのが縁となり「大阪いろは新聞」の記者となる。次いで都・改進・中央新聞の三面記者となり、三〇年朝日新聞社入社、仰天子の号で長らく連載小説を執筆していた。葬儀は東京市下谷区谷中真島町の臨江寺。

資料3 「日本文学大事典」 第四卷 新潮社 昭和二五年

武田仰天子 小説家〔本名〕頴〔生死〕安政元年七月生、没年未詳〔閨歴〕大阪堂島中二丁目に生れ、漢籍を高木越橋に、漢詩文を近藤南州に、南画を水原梅崖に学び、又堺の泉立河泉学校に学んだ。明治二十二年「都の花」に「三都の花」を発表して以来、渡辺霞亭(別項)と共に関西文壇の重鎮となり、大阪朝日新聞に小説を連載し、傍ら二十四年から二十五年にかけて大阪の雑誌「なにはがた」に「寒念仏」その他数篇の小説を寄せた。三十年頃、東京朝日新聞に關係し、「諏訪の都」「川越合戦」「弓矢八幡」等、主として興味中心の歴史小説を連載し好評を得た。健筆にして多作なことは渡辺霞亭に譲らなかつた。その代表作には「明智光秀」「天晴才二」等がある。(高須)

資料4 「大人名事典」 平凡社 一九五三～五五年

タケダギョーテンシ 武田仰天子(1854-1926) 小説家。名は頴、安政元年七月、大阪堂島に生る。長じて堺の河泉学校に入学した。明治二十二年「都の花」に「三都の花」を発表して文壇に入った。二十三年「新著百種」に「新世帯」を公にし、ついで京阪の新文学運動に加はり、雑誌「浪花瀉」その他に続々新作を寄せた。のち「東京朝日新聞」に創作を発表したが、最初の小説は「諏訪の都」で、爾来主として同紙に作品を掲げ、三十四年に書いた「何」「梅若心中」等は読者の喝采を博した。その主なる作品は概ね歴史小説で、「明智光秀」「荒木又右衛門」等は代表作である。大正十五年四月歿す。年七十三。(高須)

資料5 日本近代文学館編 「日本近代文学大事典」 第二卷 講談社

武田仰天子 安政元・七・二五～大正一五・四・一〇(1854～1926) 小説家。大阪生れ。本名頴。大阪で小学校教師をしていたが、明治二一、二二、二三年ごろより文壇に入り、大阪いろは新聞から都、改進、中央の三面記者となり、三〇年東京朝日新聞にはいった。その間「都の花」「新著百種」「少年文学」「読売新聞」「文芸倶楽部」「万朝報」などにひろく執筆して硯友社の外廓となるいっぽう、明治二四年大阪で「なにはがた」を発刊し、「浪花文学」にいた

武田仰天子の生涯と作品

武田仰天子の生涯と作品

るまで、渡辺霞亭らとともに関西文壇の重鎮であった。「蝦夷錦」(明治二六・六 春陽堂)のほか大阪書肆高山堂から多くの単行本がある。東朝入社後は、『諏訪都』(明治二〇・六・二七〜八・一〇)を最初に、『清正』(大正五・六・三〜九・二五)まで三〇編以上の長編時代小説を執筆し、半井桃水とともに東朝の通俗読物の双壁として、いわゆる大衆文学の先駆的存在であった。また「婦女界」などにも執筆した。(土佐 亭)

資料6 滑川道夫他編集 「作品による日本児童文学史1明治・大正期」 牧書店 昭和四十三年十二月十日発行

武田仰天子(一八五四—没年未詳)小説家。本名額。大阪草島に生まれる。堺県立河泉学校卒業。「春日局」「明智光秀」「荒木又右衛門」などの歴史・伝記小説を書いて名を成す。明治二二年「三都の花」を発表して以来、渡辺霞亭と共に関西文壇の重鎮となった。児童文学関係の作品では、国語教材として教材化された「競馬」(明治四〇・九)がある。文部省が高等小学校読本の仮作物語教材を懸賞募集し、小波をはじめ芳賀矢一・上田万年などに審査せしめ十四編当選、そのひとつである。他に「二代忠孝」(少年文学第二十七編)、教育小説「尼法師」(明治三五)がある。

資料7 松本龍之助著 「明治大正文学美術人名辞書」 国書刊行会 大正十五年四月五日発行

武田 粲 タケタアキラ(彫)

明治十六年東京に生れ、初め竹中光重に就いて五年間木彫を学び後東京美術学校に入り、明治四十年木彫科を卒業した。間もなく伊太利に渡り後英国に転じ建築装飾を学んで大正九年一月帰朝。東台彫塑会会員となった。父は有名な小説家武田仰天子である。

資料8 朝日新聞大阪版朝刊 昭和六十一年七月十八日「声」の欄

祖先が渡ったアルゼンチン 西宮市 平井 邦男(大学助教 43歳)

アルゼンチンのアルフォンシン大統領訪日にあわせて十五日付「天声人語」は移民にふれ、花の国アルゼンチンの文化を支えているのは日系人であり、移民百年の記念行事が行われていると書いている。

私の祖先武田粲(あきら)は移民の一人として昭和初期に渡った。彼は彫刻家だった。父は明治の有名な小説家武田仰天子である。仰天子は私の曾祖父(そふ)にあたる。私は最近、仰天子について調べる機会があり、その縁で粲についても多少知ることができた。

粲は明治四十年、東京美術学校木彫科を首席で卒業し、嘱望されてイタリヤに三年留学、そのまま帰国せず十二年にわたる世界放浪の旅に出た。帰国すると、同期の朝倉文夫氏を中心とする彫刻界ができたが、おそれになじめなかつた粲はアルゼンチンに新天地を求めた。そこは放浪のすえに見いだした「最も美しい国、住みよい国」だったという。

最近、幸いにも武田家が存続されているのを知り、秘蔵されている粲のトラの彫刻を見ることができた。なかなか見事な出来栄であった。粲の子孫はアルゼンチンにすっかりと根をおろした。長男はブエノスアイレス市の日亜振興商事で日アの橋渡しにつとめているという。

私にとってアルゼンチンは近くて遠い国だった。しかし大統領の訪日を機会に身近な国になりつつあるのを感じる。天声人語は「あの敗戦後の混乱期に、飢えに苦しむ日本人のために、アルゼンチンが救援物資を贈ってくれたことを、私たちは忘れてはならない」と語っている。その一助になるかどうかかわらないが、来年あたり、ルーツを求めて訪れ、祖先の足跡をたどってみたいと思っている。



仰天子の墓（臨江寺）



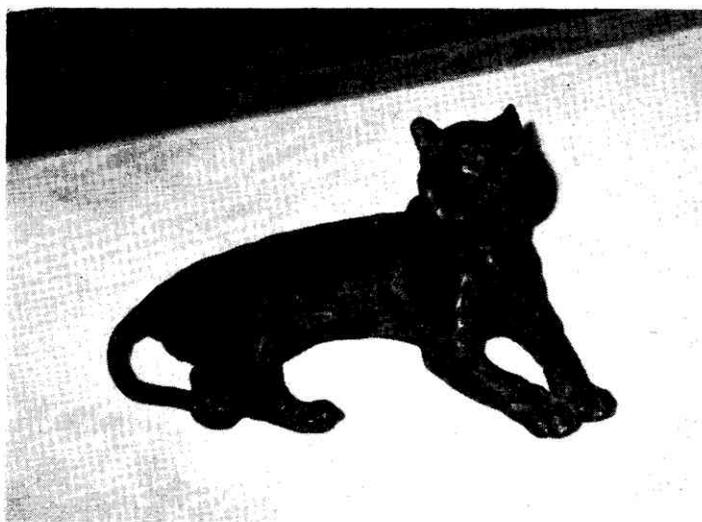
仰天子のレリーフ



二男 武田 茂



長男 武田 絜



トラの像（武田 絜制作）

武田仰天子著作一覧表

年・月	著作名	掲載誌	年・月	著作名	掲載誌
明22. 3	三都の花	都の花	明31. 9	つやもとゆひ	明治小説文庫第10巻
明22.10	相思盡譜	都の花	明31. 9	逆まく浪	東京朝日
明23. 1	雪鳴深山鳥	百千鳥	明31.12	極楽ざらい	太陽
明23. 4	水の余波	都の花	明32. 1	弓矢八幡	東京朝日
明23. 8	浮花土産十種	都の花	明32. 3	俱梨迦羅龍	東京朝日
明23.12	造酒奴	都の花	明32. 6	大懺悔	文芸倶楽部
明24. 2	竹夫人・鐵如意	しがらみ草紙(17号)	明32. 6	歌枕	東京朝日
明24. 3	みをつくし	千種草紙	明32.10	百年目	東京朝日
明24. 6	艶物語	なにはがた	明32.12	源氏車	東京朝日
明24. 6	葉さくら	しがらみ草紙(21号)	明33. 4	伊達若衆	東京朝日
明24. 7	徳用番傘	なにはがた	明33. 7	からくり的	東京朝日
明24. 7	新世帯	新著百種	明33.11	小夜千鳥	東京朝日
明24. 8	若後家	なにはがた	明34. 3	何	東京朝日
明24.10	滑稽5人男	なにはがた	明34.10	佛	東京朝日
明24.10	つやともゆひ	金港堂小説叢書	明35. 3	大喝采	東京朝日
明24.11	武士気質	なにはがた	明35. 4	夢かたり	東京朝日
明25. 1	うづみ火	なにはがた	明35. 7	三日月形	東京朝日
明25. 3	寒念仏	なにはがた	明35. 8	尼法師	『教育小説』(金港堂)
明25. 7	女心	なにはがた	明35.10	菊唐草	東京朝日
明25. 9	浪花名所蟲どころ	都の花	明35.11	荒木采女	青年界
明25.11	遊柿	文字鹿子	明36. 1	薩摩琵琶歌	東京朝日
明26. 1	女ごころ	『深見ぐさ』図書出版	明36. 1	紅草草紙	不詳
明26. 2	寄進帳	浪花文学	明36. 3	三日月形	単行
明26. 5	浮世草紙	同楽業談	明36.10	倭邸邸	東京朝日
明26. 6	滑稽不老術	都の花	明36.11	にはか節	単行
明26. 6	生娘形気	浪花瀉第2集	明37. 5	釋迦五郎	東京朝日
明26. 6	蝦夷錦	単行	明37. 6	丸腰銀次	不詳
明26. 8	徳用番傘	浪花瀉	明38. 1	唯心	東京朝日
明27. 4	二代忠孝	少年文学(博文館版) (27巻)	明38.10	坂崎成正	東京朝日
明27. 5	命とり	春夏秋冬(2、夕すゞみ)	明39. 5	眞帆片帆	東京朝日
明27.10	黄菊白菊	開化新聞	明40. 1	誰家子	東京朝日
明28.10	当世記者気質	文芸倶楽部	明40. 7	湯島近辺	東京朝日
明29. 3	花散里	太陽	明41. 7	勘左衛門	東京朝日
明29. 7	男禁制	文芸倶楽部	明41.10	落入旅日記	手紙雑誌
明29. 7	局松島	単行	明42. 5	春日局	東京朝日
明29. 8	井字橋	文芸倶楽部	明43. 3	荒木又右衛門	東京朝日
明29. 8	熊王丸	万朝報	明43. 9	冷い山	兄弟姉妹
明29.10	深なさけ	文芸倶楽部	明44. 3	明智光秀	東京朝日
明29. 11	源三位	単行	明44. 5	女伊達	大学館
明30. 6	友引	新作文庫	大(元)4.4	曾我兄弟	東京朝日
明30. 6~8	諏訪都	東京朝日	大 2. 5	文覺上人	東京朝日新聞
明30.10	鬼退治	文芸倶楽部	大 3. 3~4. 4	静御前	婦人世界
明30.10	川越合戦	東京朝日	大5.6.27~9.25	清正	東京朝日
明31. 2	楽屋銀杏	東京朝日	大 6. 7	相馬大作	面白倶楽部
明31. 7	紅筆草紙	東京朝日			

武田仰天子の生涯と作品

附録 「くらべうま」

明治四十年文部省小学校「国語」教科書

競馬くらべうま

武田仰天子たけだ おうてんし

むかし、ある鎮守の宮の祭に、『競馬の神事。』といふ事があつた。その時は、宮の氏子の五箇村から、子供の騎手を一人づゝ出して、鎮守の森の池のまはりで、競馬をさせたのである。

それで、競馬に勝つた騎手を出した村は、次の祭の日の来るまで、まる一箇年の間、五箇村の頭になつて、他の四箇村を支配する掟であつたから、自分の村から出した騎手がうまく勝を取つてくれると、その村の大きな名譽になるので、どの村でも騎手を定めるのに苦心して、村内の多くの子供の中から、馬に乗る事が一番上手な者を選びに選び抜いたのである。

さて、ある年村々で撰ばれた騎手の中に、馬に乗る事のすぐれて上手な子供が二人まで加はつてゐた。一人は熊吉一人は喜之助といつて、年は同じ十五歳、上手さもまた同じほどだから、たちまち世間の評判になつて、『今年の競馬はさぞ面白からう。』と言はない者はないくらいで、その祭の当日には、おびたしい見物人が早くから鎮守の森へ詰め掛けた。

やがて、定の時刻が近づくと、五箇村の五人の騎手が、それぞれ供の者に馬を引かせ、わが村々の庄屋を始め、多くの人達に付き添はれて、鳥居の内へ集まつて来た。

宮の神主は、騎手がみな集まつたのを見て、まづ神前で、祝詞を上げて、それが終ると、『支度をせよ。』といふ相凶に、一番太鼓を打ち鳴らした。

五人の騎手は、その時、社に向つて、『なにとぞ、勝利を得ますよーに。』と祈つて、そして、皆わが馬に跨がつて、次の相凶を待ち受けた。

村々から付き添つて来た人達は、たがひにわが騎手の傍へ行つて、『是非勝たなければいけないぞ。』『負けたら、村の名をれになるぞ。』『しつかり遣つてくれるのだぞ。』などと勢を付けてゐる。

武田仰天子の生涯と作品

神主は、場合を計らつて、『さあ並べ。』といふ相凶に、二番太鼓を打ち鳴らした。

騎手は直に打ち連れて拜殿の傍へ行つて、そして発足点と、決勝点とを兼ねた、大きな立石の前に並んで、馬の頭を揃へながら、右の手には鞭、左の手には手綱を控へて、三度目の相凶をおそしと、息を詰めて待ち構へた。

やがて、『それ出よ。』と三番太鼓が鳴り渡つた。

附添人も、見物人も声を合はせて、自分自分のひいきの名を呼びながら、『負けるなよう。』『しつかり遣れよう。』とはやし立てて、皆騎手を励ますのである。

騎手は、たがひに、負けず、劣らず、池の回りをぐるりとまはつて、そして社の横手まで来た頃は、誰も余り甲乙はなかつたが、しばらくして鏝の手なりに拜殿の前へ折れまがつた時は皆の間がひどく乱れて、一騎後れ、二騎後れ、続いて三騎までも後れて、流石は上手の熊吉と喜之助だけが、しかも揃つて、決勝点へ同時に着いた。

喜之助に付き添つてゐる庄屋は悦んでをどり上つて、

『やあ、勝つた、勝つた。喜之助が勝つた。これ、喜之助お前は豪い。能く勝つてくれた。』

と褒めはやす。熊吉に付き添つてゐる庄屋も、また同じよーに、悦んでをどり上つて、

『やあ、勝つた、勝つた。熊吉が勝つた。これ熊吉、お前は豪い。能く勝つてくれた。』

と褒めはやす。喜之助の方の庄屋は腹を立てて、

『おい、お前がたは何をいふのだ。勝つたのは喜之助で、熊吉は負けたのだよ。』

と言ふ。熊吉の方の庄屋もだまつてはゐない、

『いや熊吉が負けるものか、立派に勝つた。だから来年の今日までは、お前の村も、他の村々も、私の村の下に付いて支配を受けなければならぬ。たし

かに熊吉が勝つたのだもの。』

と云つて、争ふのである。その時、神主は拝殿から声を掛けて、

『これ、お前がた、まあ待つた。今のはどちらが負けたのでもない。二人とも同じ時に立石の所へ駈けて来たのだから、勝負なしだ。しかし勝負がなければ、支配をする村が極らなくて、この後一年のあひだ、五箇村が治らないから、是非とも、勝負を付けなければならぬ。よつて、その二人にもう一度やりなほしをさせるが宜しい。』

と指図した。そこでまた今の二人に駈けなほさせる事に極つた。ところが、どちらも意地になつて、熊吉がたは熊吉に、

『お前、今度はあんな勝ち方をしないで、きつぱりと勝つてくれる。もし負けたら、わが村の恥になるから、無理にも勝て。』

と言ひつけた。喜之助がたは喜之助に、

『これ、負けるなよ。もしも負けたら、お前を村に置かないで、すぐに追ひ出してしまふぞ。』

ときびしく言つた。それで二人は『なんでも勝たなければ。』と励みながら、また立石の前に並んだ。

神主は、また『出よ。』との太鼓を鳴らす。

二人は、直に駈け出して、一生懸命に池の堤をまはり始めて、およそ中ほどまで行くあひだは、たがひに五分五分に進んでゐた。

が、熊吉はわが馬がつかまづいて、前足を折つた為に、つるりと地上へすべり落ちて、その機会に、ころ／＼とところがつて、池の中へどんぶりとはまり込んだ。しかも、そこは深い所だ。

喜之助はおどろいて、たちまちひらりと馬から飛び下り、水際へ走つて行つて、一たん沈んで、また浮きあがつた熊吉の襟髪を引つつかみ、ぐつと岸へ引き上げた。

付添人も見物人も胆をひやして、駈け寄つて、熊吉に水を吐かせるやら、医者と呼びに走るやらで、上を下へのさわぎである。

喜之助がたの庄屋は喜之助の背をたゞいて、

『これ、お前はまつたく豪い。感心だ、／＼。熊吉の落馬したのを、お前がもし幸にして構はないで馬を駈けさせたら、それこそ勝も勝も大勝になつて、私を始め、村の者一同がどんなに悦ぶか知れないのに、『人の命にはかへられない。』と、後で私等に小言をいはれる事も忘れて、敵を助けて遣つたのは、俠氣のない者にはできない事だ。いくら言つても感心だ。実にお前は豪い子だ。だが、困つた事には、相手の熊吉があつた通りで、この駈競かけくらのやり直しは、今はとてもできないから、今日の勝負が定められない。定められないとすると、いま神主様が言はれた通り、支配をする村が極らなくて、この後一年のあひだ、五箇村が治らないからなあ。』

と、さも当惑らしく言つた。

熊吉がたの庄屋は図らずそれを聞いたので、やがて側へ寄り、
『いや、その御心配は御無用です。勝はあなたの方へゆづりませう。俠氣な喜之助さんのおかげで、私の村の者一人の命が助かりまして、こんな嬉しい事はないのですから、そのお礼に喜之助さんが勝つた事に致しませう。いや、なにも私がこんな恩に被せがましい事を言はないでも、どうせ喜之助さんの勝に極つてゐたのですから、どうか今日から一年のあひだ、あなたの村が他の四箇村の頭になつて、御支配をなすつて下さい。』

と言ひ出した。

その事を聞いて、神主も同じく喜之助の志を褒め、支配は其村に委す様に云つたので、いよ／＼今日の競馬は、喜之助が一番勝になる事に定つた。かう云ふ次第で、喜之助はわが村へは名誉を得させたいけれども、競馬には真に勝つたのではないのだから、自分はあまり名誉でもなかつた。しかし、その代りに図らず世間の人達から、『喜之助さんは見上げた子だ。あつぱれな心がけだ。』と褒められて、競馬の名誉にも遙にました大名誉を得た。

(明治四十年文部省『教訓仮作物語』)

葉ざくら

仰 天子

二重まんと、の類虎の襟を立てゝも、まだ寒かつた梅屋敷行きに瓢箪の黴を洗うて己来、描き更紗の下着の紐引き出して、これだけ脱いで来たなら好かつた、何ともいはれぬ好い時候、遊ぶなら今ぢやと桃山のそゞろ歩き。間もなく桜の宮に船を泛べて、燃えたつやうな緋縮の湯もじに、金糸の縫ひある襟を掛けたたまのりの襦袢一枚、その上から細帯めた小娘連が、跣足めづらしきに堤のあたり駈り回って、きやッきや、くくと捕らへ合ふき、ッきりもん、色気のあるやうで無邪気な遊びを余念なく見とれて、一町裏の衣物の膝へ杯落としたは昨日と過ぎ去り、いまは仕様事なさに居間に閉ち籠もつて見たれど、机辺の書はみな目を通した物のみなれば手が行かず。指先で烟管まはしながら欠伸して、「あゝ日が長うなつた。」

瓦全評瓢箪の黴を洗うて己来とは下戸の我の思ひ到らざる所。「細帯」を「ひしごき」としては如何

好尚評織巧

遊び癖のついた我れは、辛気くさうて一室に居たゝまらず。かつて蝴蝶に逐はれた下駄引ッ掛けて、流石近所手前もあれば、瓢箪なゝにひよろりと戸外に出でしが、友人の門を叩いて筆硯の多忙を妨げるも心なしと、足の向く方角は花のない桜の宮。「不愛繁華愛緑陰」とのすね心ではないが、「色は年増」と常に悟り顔にいふ我れとて、花がなうてもまッ、さら見捨てたものであるまいと、思うての事なり。

瓦評「かつて蝴蝶に逐はれ」の句何等の巧思ぞ

梅評「色は年増」の一句後段の伏線

好評近所の手前をかね友人の多忙を思ひ遣る「我れ」の氣質すこしくあらは

武田仰天子の生涯と作品

る

綱嶋過ぎて大長寺の塀に付いて曲り、淀川堤に上がって見渡せば、兩岸の新樹翠烟籠め、水青く人も青し。どれが桜樹かと思返りつゝ行くに、先度来た時とは打って換はって、大手振っても咎める者なく、車を除ける世話もなく、目障りになる葎管張りもなければ、耳につく袖乞ひのべんべら、三味線の音もなし。まるで夕立の後に行水した心持ちで、俯仰指顧思ひのまゝにして、この時はかりは唯我独尊、ひとり好がりの天狗俳諧、一句を吐いて談林の神髓はこゝじやと、いつの間にかやら鳥居ちかくへ到りぬ。

梅評「天狗俳諧」を「俳諧天狗」としたし

秋渚評以上の数十句力を極めて花後寂寞の景物をうつし出だせりこは是後段に女主人公を出ださむがための襯染たり。「天狗俳諧」梅評よろし

好評秋子の評わが意を得ず力をきはめて花後寂寞の景物をうつし出だすといへるは何たる思ひ違ひにや。「天狗俳諧」改めずもあれ。「なし」の畳用、不調の調おもしろし

鳥居前に一構への青湾茶寮、花の頃は借し屋札張ってありしが、今は住む人ありと思しく、張り換へた分の障子閉めてあり。庭前に建つた青湾の碑石高く生け垣の上に抽んでたれば、先度から就いて覩たしと思ひ居たるに、今日はさいは堤に沿うた柴折戸明いてあれば、つひうかゝと這入って石を撫でながら首傾けし時、端なく耳を掠める琴の響きに振り返れば、絃を弄ぶはつひ此所な坐敷なり。

好評この節青湾茶寮の实景を移し出だせたと少し粗雑にして足らぬがもの筆なるは惜し。「建てた」「就いて」雅俗折衷にも程こそあれ

代々へち腐った画工文人などの住む家と聞いて居るに、今この有り様に魂消て、豆腐屋で蒲焼の御馳走になつた思ひなるに、続いて放ちし御声のうるはしさ―静に聞けば鶯怨み燕咽んで、打ち沈んだ調べなれど、喉嬌びて手の巧みなるに聞きとれて、碑前の捨て石に腰を据ゑ、うっとり心遠くなつて、すでに曲の終りしを知らず。

梅評彈琴の声を聴くのみにて障子のうちに如何なる美嫌のあるやを暴露せざる所作者の狡猾手段

好評これ狡猾手段にあらざる閉てたる紙障誰ありてか内陣を見透し得む

あゝこれは面白い！ われ無粋で何といふ曲かを知らぬが、痒い所へ手の違く弾きやう。さても何人であらうか。こんな淋しい一つ屋の中、娘の一人住みではよも有るまい。親が娘連れて隠居したといふやうなものか。親は兎もかく娘の姿を一目見たい。あの障子にがらすを嵌めてあらば、直に見えるものを氣の利かぬ。どんな美しい娘であらうと、清浄な心の上から紙一重のうち床しくて、見えもせぬに伸びあがらうとした時、後より呼ぶ鈍調声、「これお前さん誰にこたへて？」

梅評鴛鴦燕咽の嬌声を説いて未だ終らざるに此一個の鈍調声を点出す一頓絶

妙

好評碑を打たずして琴の主にあこがる亦痴亦呆人情の微写し出だせばさもあ

りなむ

この家の下部なるべし、岩丈造りの老人が片手に箒片手に塵斗持って立って居るに、われ驚いて立ち上がり、「これはきつい疎忽でござった」といへど、「ひとの先裁へ断りもなう這入って、疎忽でござったで済みますか。「いやこの碑文を読みたひと思ふ心から、柴折戸の明いてあつたに何の氣も付かず……」「えゝぬけ／＼と何をいふぞ。ソッチや向けに平太はッて居て、この石塔の字が読めると思ふか。常々若い男には逢はして呉れるなど言ひ付けられて居るに、裏口から忍ばれたとあつては、この私が御主人へ対して申し訳がない」と、追ひ／＼見下げた口氣でいふ。余ほぞ一こく者と見ゆ。

秋評かゝる禁制のありながら柴折戸の自然にあけるは如何

好評自然にあらで大方庭掃除の為なるべし

われ少しむつとしたれど、元々いひ開きの立たぬ罪を犯して居る事とて、枉げて小腰を屈めながら、一直に出やうと思ふ所へ面白い琴の音が、「いや何というてもこの分では」といひ掛けるを、「これ九助、さう言はずと帰ッてお貰ひ

申すが好い」と、障子の内より優しい声！

秋評作者巧に筆を弄して唯僅に障子の内より声を発せしむるのみ愈出でゝ愈

妙

好評梅子の評解しがたし

娘が今の扱ひうれしく、まして下部の言葉に男の来るを堅く禁じてある様子なれば、年は何れ十代で、桜の花も羞づべき器量なるべしと、ます／＼見たけれど叶はぬ事なれば、強ひて見切つて出でんとせしが、なほ下部の彼れ是れといひ募るに、われも一言二こと言へば、果ては互に大声になりぬ。娘は打ち捨てゝも置かれずと思ひしか、「これあのやうに仰しやるものを」と、障子開いて椽側へあらはれ出でたり。

瓦評新緑の木かげに談林の神髓を味ふ雅人が大声あげて口論するとは少し不

似合ひにあらざるや

好評断定して娘となす、作者の何知らぬ顔にくし

これはいかに！ 二十を越さぬ娘盛りと思の外の大年増にて、まづ我れに会釈して下部に向ひ、「つひ何心なう這入つたと仰しやるではないか。そして直に帰らうとなざるを、其方が引き止めて事を大きくするといふもの。お邪魔をせずと出て頂くが宜しい。

瓦評「そして直に帰らうとなざるを云々」と女主人公の言葉逼真の筆といふ

べし

秋評まだ三十足らずのものを大年増とは酷ならずや

好評われもさおもふ

われこの隙きに婦人の姿を窺み見るに、はや三十に手の達きさうな年頃にて、半元服の御寮人風、色白く眉の痕青く、ふっさり多い髪を櫛巻きにして、素肌に着た袷の裾長く引き、紋縞子の細手の帯色気もなく巻き付けたる躰、瘦さ形の上に子し痺れたるやうなれど、それが一段の興味あつて、憎からずと我れは思へり。

梅評甲読者は思へらく彈琴の主人は定めて妙齡の美嫌ならんと乙読者は思へ

らく作者巧に読者を歎きて大醜婦を出だすならんと然るに両様の想像破れて此意外の人物を出す奇絶妙絶

下部は婦人の言葉に是非なく、脇へ寄って我れに出よがしの擬勢。今更になつてこの坐惜しむべしと思ふ我れも、此所にとどまらんすべ無ければ、何となう手ぶらで帰るやうの心を励まし、黙礼してやうく辞し去り、將に生け垣の外に出でんとせしに、つくく我れを見入り居たる婦人あわたゞしく、「もし貴君は植村さんではござりませんか」と叫びたり。

瓦評この時男の心情如何

この声に我れ立ちどまれば、「漣に渡辺橋すぢの辰之助さん」と重ねていふ。はて我がをさな名生産の地を知つて居るは不思議と、一足戻つて見返つたれど、われには更に覚えなし。婦人はなほも、「余りお久しいゆゑお忘れでもござりませうが、妾は桜橋の北詰めの、「はゝアなる程」。なる程をさな馴染みの医者の娘、飯ごとするにもお前は私の嫁さんちやと、膝を引つ付けちんと坐つて、子供心にも穢ないやつは厭ぢやと、大勢の小娘の中から撰り喰ひした評判の美しものであつたかと、「そんならあなたは阿たきさんか。まア嬉しい！、覚えて居て下さりますか。仰しやる通り妾は亀園の瀧でございます。これは珍しい。「本真にお珍しい」と互の悦び。この時下部の憫れた顔よほど可笑しかりき。

瓦評この時男の嬉しさうな顔よほど見たかりき、

「さア辰之助さん、どうぞお上り下さりませ。誰も気の張つた者は居りませぬ。さア是非一遍お上がり下され」といふに、われも昔なつかしければ、直に椽側より上がらんとせしを、表へ回つて呉れといふに、何処からでも同じ事ぢやにと思ひながら、いふに任せてくるりと回り、表口より入ればはや此処へ出迎ひに来て、矢張り先の坐敷へ誘ひ、障子両方へ明けはなち、われを坐蒲団の上に請じて、まづ下部の無礼を詫び、振り向いて下女を呼びしが、眼で知らせて其所に坐らせしのみ。みづから茶を煮菓子をつめて、おろそかならぬ持てなしなれど、われは嬉しいやうな気の張つたやうな心地なり。

武田仰天子の生涯と作品

瓦評男をわざ／＼表口へ回らせ且障子を明け放つなど作者の細心敬服々々
秋評「振り向いて云々」の所よく男性禁制の意に適へり

「こんな所で貴君にお目にかゝらうとは思ひませぬだ。「さア真に不思議な所に逢ひました。一体いつからお目にかゝらぬやら？、「妾が始めて縫物屋へ参つた年かと思ひます。それならば十三の年、今で足掛け十五年になります。さうなりますかなア。私が忘れて居たもその筈ぢや。御婦人方はお変はりが早いゆゑお老けなさつたと申すのではないが。「おほゝゝゝ、ゑらいお口上手におなりなさいました。妾は色々心配いたしましたゆゑ、老けたに違ひござりませぬ。「御心配とはどんな？、そして御主人は只今どれにお居でなさります。「はい心配と申すもその事でございます。「へゝゝえ、お構ひなければお聞かせ下され」といへば、阿たき言ひかけて涙ぐみぬ。

梅評語法の軽妙作者独得の伎倆

秋評漣にその人と知り居るとも十五年間も相見ざればその面貌声音互に變りて頗に其人とも思ひ出で難かるべきにこの女性が偶然の出会いにおいても能くこを記し居て一二語の間直にその姓名を呼べるは少々唐突の嫌あるやうに思はるもしそが旧住の地を問ひてのちはじめて記憶をくりかへさせなば可ならむか
好評男子、婦人を見ちがふことはあるも婦人、男子を見せるゝこと余りなかるべし

阿瀧はソツと眼を拭うて少し気を換へ、「辰之助さん、妾は貴君と御一所に遊んで居ました時が、一番罪がなうて面白うござりました。貴君は屹度思ひ出しもなさりますまいが、妾は続けて不幸に逢ひましたゆゑ、始終あの時の事を思ひ出して、もう一遍あのやうにして遊んで見たいと思つて居ります。あの時分に貴君は遠い所へ御修行にお越しなさつたと聞きまして、まことに本意なう思ひました。それから妾が十六の春、あのう……ある家へ伺いたして、舅姑のないう気楽な家と思ふたは暫で、なり行きから実家の両親を引き取り、いかい気兼ねを致しました。その後両親に死に訣れて、阿父さんの十三回忌、阿母さんの

武田仰天子の生涯と作品

七回忌を勤めた今年の一月、連れ添ふ夫に……「えッ、御凶事でもござりましたか。「はい、妾ほど不仕合はせなものはなからうと思ひます。それにまた因果と子のございませんで、あとにも先にも一人星、たよりない身の上お察し下され」と、人目も構はず咽び入りぬ。

瓦評「ある家へ何いたして」とは浮世にくちぬ若後家の真情写し得て妙なりこの器量で若後家とはいははしやと、「さうお敷きなざりますな。及ばずながらお力になりませう。不仕合はせはあなたばかりでなく、私も去年妻を死して、今に不自由に暮らして」といひかゝりに、阿瀧は立って、琴を据ゑた上に掛けし純子の帳をかゞぐれば、泉涌寺形の位牌に二行の戒名。「これは御両親の御位牌か。「いえ一方は夫一方は妾、世の慣らはせに背いて朱を入れませぬは、夫と共に死んだつもり。山にも入らず斯うして居ますは、年頃の娘を貰うて、それに養子して家を立てさせたい為ばかり。元の家に居りましては、婿を貰へ男を持つてといはれるが五月蠅く、思明を待つて此所へ引き越したのでござります。年は十でも十五でも、お心当たりがござりましたなら、どうぞ娘のお世話を願ひます」と、折り入つての頼み殊勝なり。

秋評たとひ亡夫の事に心迷へるも辰之助がかく誠愾を致せるに阿瀧一語之に答ふるなきはいと無情ならずや

好評秋子の評なくもがな

「承知しました。心がけて居りませう。なる程さうした淋しさのお心遣りに琴をなさるのか。「いえ只今の妾の身に、慰みどころではござりませぬ。死なれた夫がきつい琴好き。病中にも一日欠かさず聞いて楽しめましたゆゑ、暇さへあらば位牌に向かうて、妾は泣いて手向けて居ます」と、事ごとに亡き夫を慕ふ言葉。なる程これでは男禁制といふも道理、別して嫁夫の我れの長居するは憚りありと、辞し去らんとせしが先裁見かへり、あゝ葉桜の眺めは一入、見捨てゝ帰へるは残りをしや！

瓦評結末の一句ありふれて面白からず

梅評一結極めて妙なり余韻嫋々

総評

瓦評行文の平易流暢なるは今更いふまでもなしわが上方風の俗文はこれ作者が新創の独技こなし得て自在といふべし

梅評一個の風流男子を捉へ来りて自在に寡婦の境遇を説く其間或は隱或は顯或は喜び或は悲む読終りて巻の短きを恕むこれ短篇小説の上乗。妄言多罪秋評阿瀧亡夫を追慕するの極り遂に厭世主義を好むに至る斯の如き婦人恐らくば今世その匹儔なかるべし今作者特にこを取りて筆を弄せるはわが知りたき所なれど所謂隱微のこゝに存せるにや

好評総評なし評の評またおなじ